

学籍番号：204501 名 前：袴塚世那 Sena,HAKAMATSUKA

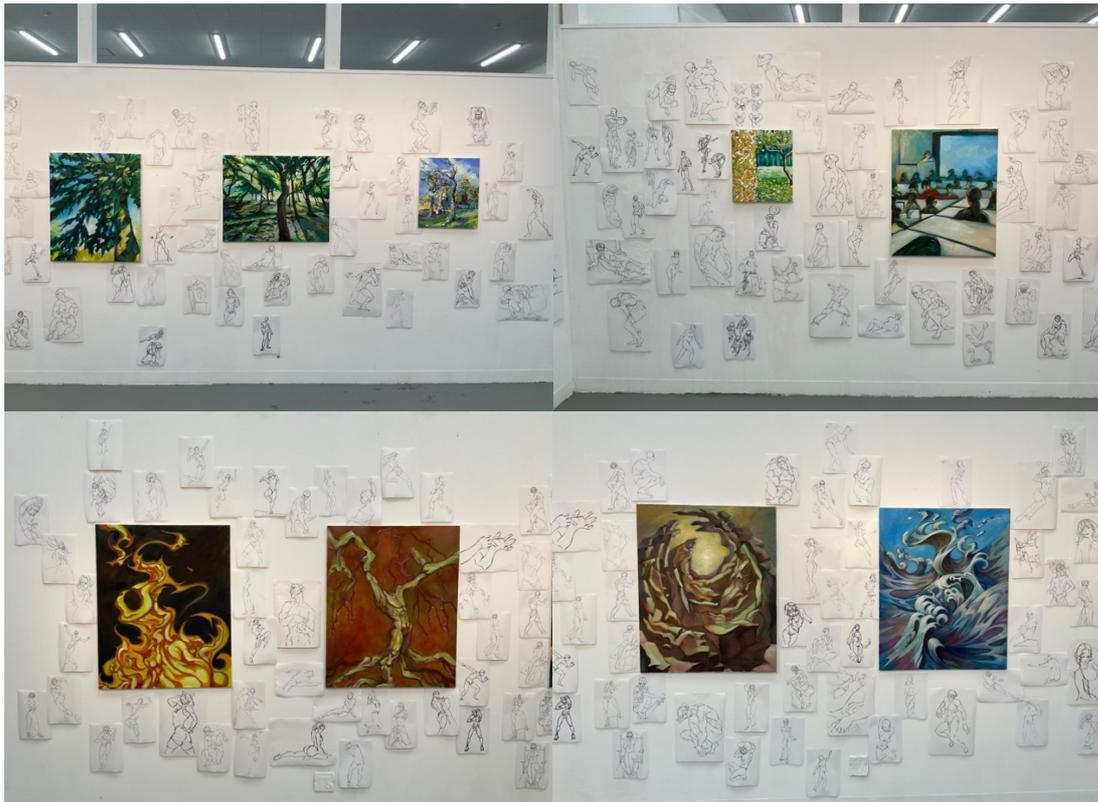
研究室：遠藤研究室

R5 年度 長岡造形大学 美術・工芸学科美術表現コース 卒業研究

研究テーマ 「記憶を通して描かれる絵における自然との精神的繋がりに関する研究」

【作品名】

The Beginning



【展示意図】

私が今回着目し、作品のテーマにしている自然とは、もののうちにおける運動変化の源泉であり、これは人のドローイングを行ってきた中で、人にも植物などのモチーフにも等しく与えられているものであると考えた。このことから、私たち人間は自然の中の存在であるということを表現するためである。

【研究目的】

私たち人間を含むもののうちにおける運動変化の源泉である自然というテーマで絵を描くという私の行為から、自己の構築過程を分析し、制作した作品で人々の言語化によって切り離されていた自然と人との繋がり「核」へと近づくことで共に精神を育むことである。

【背景】

私が生きていく上で周囲の視線が気になるようになり、私自身のこうしたい、ああした

いという考えに他者のこうあるべきという価値観が混ざり合うことによって本来の私の思考性が見えなくなり言葉で考えるあまり、私が私の描きたいもの、なりたいものについて、わからなくなる（自分が見えなくなる）という問題を抱えていた。この時私がキャンバスにはじめに描いたものは自然※だった。

※アリストテレスの著作「自然学」により唱えられた「時の流れによる天気の変化、風に木の葉が靡くといったものうちにおける運動変化（実態の変化・性質の変化・量の変化・場所の変化）の源泉または原因」を思考する上で定義付けることとする。

ではなぜ私が自然に興味を持ち、描くに至ったのか。と、考えることから私の研究は始まった。

【考察①】

はじめに、本郷新の著書、『彫刻の美』では、比例とは美の物差であり、美しいものにはその物差に秩序を持っていると記述されている。これは人も同様であり、自身の精神の形に応じて、きちんとした秩序を持たせるよう、自分だけの、新しい比例を探求しているのである。このことから私は、自然には自然の、私には私の比例（バランス）があり、美しいものというのはそのバランスに秩序を持っているのだと考えた。

私には私の美のバランスの秩序を精神に宿し、これが自己の形成、価値観へと繋がっていると考えるのだが、このバランスは常に一定ではない。時にこのバランスが人や身の回りの環境によって不釣り合いになり、新たな美しいバランスを模索するのである。

しかし、本郷新が、私たちは自然の持つバランスを感じづらくなってきていると述べているように、新しいバランスの構築の局面に立った時、多くの人間の感覚は鈍くなっているのだと考える。

これはバランスが取れている時、私は、自然の持つバランスの影響によって精神のバランスが崩れることを恐れ、無意識に自然から精神を切り離し、新しいバランスを構築するパーツを受け取ることを拒んでいることが要因となっているのではないかと考えた。

私が自分を見失ってしまうのは、この恐れに振り回された結果、散りばめられたヒントを見つけられず、変化していく環境に最適な新しいバランスを作り出せなくなり、思考が困難になったためだと考えた。そしてこうした思考性を、絵を描くという行為から考察し問題解決に近づくことができた。

この体験から私にとって絵を描く行為は自然から切り離されてしまった私の精神を再び繋げ、私の精神のバランスを育んでくれるものだと考えた。こうして育まれた精神のバランスは美しいものであり、私にとっての美術とは、精神を美しく育むための術であると考えた。

また、この模索の中、新しいバランスを作り出す工程で人はこれまでの記憶を頼りに、自己の思考性について見返すと考えている。

極端な例を挙げるとするならば、人は命の危機に遭った際、自身が助かるために、これまでの記憶からヒントを模索することに似ている。

そしてこの記憶の中での模索において、自然という存在はいつでも私の身近にあり、私は自然の持つ美のバランスから影響を受け、新しい美のバランスを見つけるということを繰り返してきたのだと考えた。ここまで私が強く自然から影響を受けているのは、幼い頃から父に海へダイビングをしに連れられたり、川で遊び、庭に生えた木に登って本を読んだり、人よりも自然と触れ合う体験が多かったことが要因であると考えている。

このことから自然という存在は私にとって重要な存在であり、記憶によって、認知に影響を受けているすべての人間にも、生活と共にあった自然は除外することはできない存在だと言えると考え、自然を私の作品の一つのテーマとすることにした。

【考察②】

研究の目的で述べた「核」とは、プラトンが唱えた、モノのもつ、目に見えない「真の姿」「理想の姿」「完全な姿」である「アイデア」という概念を言い換えたものである。彼は、この概念が現実世界とは異なる高次元な場所にあり、我々が見ているものは、「アイデア」を模倣したものであり、この世を表現した美術や文学は「模倣の模倣」でしかないと考え、「アイデア」からほど遠いものであると考えた。これはミネーシス（模倣）と呼ばれた。

その後アリストテレスは、その模倣こそが創作活動の源であり、模倣の模倣（芸術）がこの目で見ている現実を超え、「アイデア」に近づく場合がある物だと考えた。この考えがミネーシスを発展させ、その後の芸術論に受け継がれていった。

私はこの考え方に対して、そもそも人には人の見え方があると感じた。ミネーシスという考えに則るならば、人それぞれの模倣があると感じたのだ。

これを「人とモノとの快適な関係の構築を行うために、人間の様々な機能を理解していく」ことを目的としている人間工学の視点から考察した。

人は目で見たとものを脳が処理していく工程の中で、人が物事を認知するためには、「感覚」が受け取った刺激により生じた体験を、その特徴や状態から「知覚」し、その対象について、持てる記憶による知識や、他の情報を交えてその本質を「理解」という動作が行われていると考えられている。この、「理解」が、個人の記憶をベースとした知識に影響を受けているからである。

私たちが記憶をもとに思考し、行動するということは、絵を描くという行為にも記憶が関与していると言えるだろう。

そのため、この二年間で約 3000 枚のドローイングを行ってきたのだが、その過程で、私が心地いいと感じるバランスや緩急は、私の精神に宿る美のバランスを鏡のように映し出され、表現しているのだと気付いた。

【終わりに】

以上のことから、美のバランスは、私たちにも自然にも等しく与えられているものであり、このバランスの下での繋がりが言葉だけでは見失ってしまうが、絵は記憶を通して描かれるものであるため、絵を通じて、他者にこの繋がりを再び思い出させることができるだろうと考えた。この結論から今回の卒業制作展での展示では、鑑賞者が自然との繋がりを思い出し、言葉によって狭まれていた精神の成長を豊かにしたいと考える。